



妻のヒップをのせただけで…

パリはまひるのセックスが大流行ノ

このへんでパリへとんでみよう。
古い文化を誇るフランスも、むかしからスパンキングの伝統をもっている。

日本でも愛好者がふえてきたという性愛テクニックの一つ、「ジックス・ナイン」は、本場では、単なる相互器官接吻ではないらしい。

い。接吻と同時に相手のヒップに軽いスパンキングなどを加えながら、ゆっくり楽しむのがほんとうだという。

だが、フランスでは、アメリカやイギリスのように、クラブをつくってスパンキングに夢中になるといった傾向は、あまり見られない。それより夫婦が自宅の寝室でじっくり行なうケースが多いようだ。

パリなどの大都市のサラリーマンは、昼休みの時間が長いので、自宅に帰って昼食をとるのが習慣だ。

腹ごしらえができたところで寝室にひっこみ、夫人と真昼のセックスを楽しんでから、ゆうゆうと会社にもどる。

昨年までパリの個人住宅に下宿していた日本人留学生下村雄一さん(25)は、なんとか真昼のセックスを目撃したという。

「昼休みは、子供が学校へ行ってるし、訪問客もないから夫婦のセックスも明けつろげです。ある日、ぼくはちょうど昼休みの時間に大学からもどりました。すると主人夫婦の寝室から、ビシッ、ビシッとからだを殴る音がひびいてくるんです。つづいて、奥さんの泣き声まで聞こえたもんですから、ぼくはびっくり強盗でもはいったのかと思ひこみ、い

そいで寝室にかけつけました。そうしたら、ドアを開けばななしにした寝室の中で……」
下村さんが見たものは、強盗ではなかった。全裸になった夫婦が、主人はピンポンのラケットを、夫人はテニスのラケットを振りまわし、おたがいにスパンキングを行なっているすがただった。

ほうほうのていで、下村さんは自分の部屋に逃げこんだが、それからしばらくの間、奥さんと顔を合わせるたびに、スパンキングで真赤に充血した彼女のヒップを思いだして悩ましくなったそうだ。

さらに下村さんは、パリのある出版社から発行されている成人向きの雑誌で「スパンキング愛好者の告白」という手記をなんとか見つけた。たとえば、

「スパンキングのよるこびは、回を重ねるごとにますますばかりだ。妻のむっちりしたヒップを膝の上に乗せただけで、わたしのからだは快楽の期待にふるえる。わたしは、いそがない。十分も二十分も、真白いヒップを愛撫してから、おもむろにラケットを取りあげる。その気配を妻は敏感に感じとり、わたしがラケットを打ちおろす瞬間、ヒップをぎゅゅとちぢめる。

グループにアンケートを求めたところ、じつにその八十三パーセントが、スパンキングを行なっていると答えてきたのだ。

もはや、日本で流行するのにも時間の問題といえよう。

このように、スパンキングが、世界的な流行になりつつある事実、なにを意味しているのだろうか？

性心理学の専門家たちは、いっせいに口をそろえていう。

「セックスの興味の対象が、バストからヒップへ移行したためだ。バストなら、手でそつとふれば反応するが、ヒップは軽くなでたぐらいでは感じない。

そこで、ぶつたりたいたいたり、つまりスパンキングというテクニックが流行するようになったのではないか」

スパンキングは、ワイフ・スワッピングやフリーセックスなどと異なり、ごくあたり前の夫婦が、日常生活の中で簡単に行える強みがある。

団地マダムや教育ママたちが、むきだしのお尻を夫の膝の上のせ、ラケットでペタペタたたかたかっている場面などは、想像しただけでもユーモラスなものだ。



二回、三回、四回……わたしは狂ったようにラケットを打ちおろす。白い肌は、ピンク色に染まり、熱っぽく腫れあがる。(中略) 妻を膝から下ろし、そつとベッドに仰臥させる、はれあがったヒップが毛布やシーツにこ

すれて痛いのだろう。妻は涙をこぼしながらからだを浮かした。(後略) こうした手記をよるこび読者がいるというところは、あまり表だって目立たないのである。

ただ、アメリカやイギリスとちがうところは、夫婦間で個人的に行われるため、あまり表だって目立たないのである。

セックスがいったいどの国、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドにとんでも、スパンキングに、お目にかかることができる。

北欧の国々は、サウナなどのむしろ風呂が盛んだ。

すっ裸でむきされたからだを、ブナの枝でビシビシたたき合うのが、北欧の伝統的なスパンキングである。

現在では、これが遊戯化して森の中、海水浴場で、木の枝をふりまわしながら、女の子を追いかける青年たちのすがたがよく見かけられる。話はもどるが、シカゴの社会研究所で、アメリカ各地の社交クラブや